

〈解答〉

- ① 1 からかさ一本御貸し
2 おもう
3 A 〔例〕午後の食事に行けなくなる(12字) B 気の毒
4 ア
5 イ

配点 3、4、5は各2点、他は各1点 10点満点

〈解説〉

- ① 「露休置土産」は、江戸時代前～中期の落語家である、露つゆの五郎兵衛ごろうべえが書いた小噺集こばなし（＝笑い話を集めたもの）。露の五郎兵衛は、「京落語の祖」とも言われる人物で、晩年、出家して「露休」と名乗ったことが、この書名の由来となっている。
- 1 古文の会話文の終わりは「と言ふ」「と申す」「とのたまふ」などのように、ほとんどの場合「と」で受ける。本文の三行目に「といへば」とあることから、その前の「からかさ一本御貸し」の部分が会話文だとわかる。
- 2 古文に出てくる語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、それぞれ「わ・い・う・え・お」に直す。よって、「ふ」を「う」に直せばよい。
- 3 「貧僧」は、雨が降る中、「非時に行かん（＝午後の食事に出かけよう）」としたところ、「近付（＝親しい知人）」から、「かさを貸してほしい」と言われたため、「かさは一本、我が身も非時に行けば貸す事はならず。貸さぬも気の毒（＝自分の手持ちのかさは一本しかない）ので、自分が午後の食事に出かけるなら、そのかさを貸すことはできない。かといって、親しい知人にかさを貸さないというのも気の毒なことだ」と、かさを貸すかどうか思い悩み、答えを出せなかつたので、寝たふりをしてやりすぎそうとしたのである。
- 4 「非時遅くならん」は、「非時（＝午後の食事）が遅くなってしまふ」と直訳する。「ならん」の「ん」は、打ち消しの「……ない」ではなく、「……だろう」という推量の意味の助動詞である。
- 5 「貧僧」は、「近付」が諦めて帰ったのを見計らって出かけようとしたところ、「貧僧」が暮らす「草庵」の近くで雨宿りをしていた「近付（＝隣に雨やどりしてゐる男）」に見つかり、寝たふりをしてかさを貸さないという手段を、「手が悪い（＝やり方がずるい）」

と非難されてしまう。それに対して「貧僧」は、「からかさをさして大いびきをかいた（＝かさを差したまま大きなびきをかいた）」という行動で応えるのであるが、この「貧僧」の行動は、「近付」の非難に対して面目が立たず、返す言葉もなかったため、「自分はまだ寝ぼけている↓先ほども寝たふりをしていただけではない」という言い訳を、行動によって表したものと考えられる。

〔現代語訳〕

ある所の粗末な小屋に貧しい僧が暮らしていた。午後の食事に出かけようと思っていたちやうどその時、雨が降っていたので、しばらくの間晴れるのを待っていたところ、親しい知人がやって来て、「かさを一本お貸しください」と言うので、（僧は、）「自分の手持ちのかさは一本しかないので、自分が午後の食事に出かけるなら、そのかさを貸すこととはできない。かといって、親しい知人にかさを貸さないというのも気の毒なことだ」（と思つた）。（考えあぐねた僧は、）すばやく横になり、昼寝をしたような顔をした。この知人は、「これこれ」と（言つて、僧を）起こしたのだが、（僧が）寝入ったふりをして反応しないので、仕方なく（僧の暮らす粗末な小屋を）後にして、（僧が暮らす粗末な小屋の）隣の（家の）門のところで雨やどりをしていた。（知人が帰つたのを確かめたところで、）その僧は起き上がり、「午後の食事が遅くなってしまう」と思い、かさを差して外に出たところ、隣の家の門のところで雨やどりをしていた男が、「おい御坊よ、やり方がずるいではないか」と言うので、（僧は）どうしようもなくて、かさを差したまま大きなびきをかいたということである。